國學院大學学術情報リポジトリ

# 「物語」はいつ「閉じられる」のか：「現代常識」が誕生する時



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2023-02-05 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 山田, 利博, Yamada, Toshihiro |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000445 |

# 「物語」はいつ「閉じられる」のか

## —「現代常識」が誕生する時—

山田利博

### 一、問題の所在

先年稿者は、「平安時代の作り物語は、「開けたままの終結」[1]の方がむしろスタンダードなのであり、そういう観点から考えれば、しばしば問題になる『源氏物語』の夢浮橋巻は、あれで完結していると見て良いのではないか」という趣旨の論を書いた[2]。その末尾で、「物語の終結は閉じていなければならないというのは、近代の錯覚なのではないか」ということと、『中世王朝物語・御伽草子事典』[3]「物語の完結・未完」（井野葉子執筆）中に、「中世王朝物語で「閉ざされた終結」として完結している物語は多い」とある[4]ことから、「この問題を考えるには、中世の物語も視野に置かなければならないだろう」ということは指摘しておいたが、紙幅と時間と準備の不足により、それ以上のことをそこで展開することはできなかった。そこで本稿では、その補足の意味もかねて、改めてその問題について考えてみたい。詳しくは後述するが、その結果、副題に謳ったようなことも見えてきたと思うので、その点についても、諸賢の御批正をお願いしたい。

## 二、考察の範囲

簡単に済みそうな「現代の常識」から話を始めると、注（1）に掲げた書には、上田真による「川端文学における作品終結の原理」という論もあって、それを読んで稿者も、「そう言われれば川端康成は、現代作家でありながら、「開けたままの終結」を持つ作品をかなり書いている」＝「物語の終結は閉じていなければならないというのは、近代の錯覚とは必ずしも言えないかもしれない」ということに気づいたが、氏の論を読み進めていくと、それは当面あまり気にしなくても良いようである。と言うのは、「「初めから長篇の骨格と主題とを備へた小説を、私はやがて書けるとなぐさめている」（三三・五三八）という川端自身のことば[5]」と、川端が「閉ざされた終結」を目ざして推敲した複数の事例もそこには挙げられているからで、だとすれば、結果的に「開けたままの終結」を持つ作品を数多く残してしまったにしても、川端自身は「閉ざされた終結」を目ざしていたと言えそうだ。と言うことは、「物語の終結は閉ざされるべき」というのが「現代の常識」という前提に立っても、さほど大きな過誤にならないと判断できるからである。

となれば、それはいつ頃始まったのかを見るために、前節でも言及した中世の物語を見る必要が生じてくる。しかしながら、物語専門の方には自明のことと思われるが、一口に中世の物語と言っても、それをどのように捉えるかは容易に決定できない。例えば注（3）に掲げた書のタイトルは、『中世王朝物語・御伽草子事典』となっているが、そこにも書かれているように、「御伽草子」は近年「室町物語」とも呼ばれており、現に岩波の新日本古典文学大系は、そのタイトルで、その事典で解説されている八四作品のうち、二〇作品を収めている。「御伽草子」ならまだしも、「室町物語」なら、やはり「物語」としてカウントしなければならないのではないかという気もしてくるが、結論から言えば、本稿では数に入れなかった。何故なら、どの解説も大同小異だが、ひとまず注（3）の書の解説にしたがっておけば、御伽草子（室町物語）は、「第一類、物語文学の系列に属するもの」、「第二類、戦記物語の系列に属するもの」、「第三類、宗教文学の系列に属するもの」、「第四類、民間説話文学の系列に属するもの」の四類におおむね分けられ、しかも「二類、二種に跨がる作品もあ[6]」るとのことだからである。第一類はともかく、第二類以下は、平安朝の物語と同列に論ずるのは如何かと思われるし、第一類ですら「跨がる」ものがあるとす

れば、もはやカウントしようがないからである。そこで今回の考察からはこれらを基本的には除外したが、実は入れても結果はあまり変わらない。と言うのは、新日本古典文学大系所収の作品に限って言えば、すべて「閉ざされた終結」と判定できるからである。しかしこの話は、論述の都合上あとに回し、続いて先ほどのタイトルで言えば、「中世王朝物語」を概括する。

稿者もそれには同意するけれども、いろいろと問題があるというので今はその別名は使われないが、「中世王朝物語」は、かつて「擬古物語」という別名も存在しただけあって、すべて平安朝の物語と同質のものと判定した。[7] したがって、本稿の考察は主にこれらを分析していくこととなるが、問題はこれですら数が一定していないということである。そこで、もちろん異論のある向きもあろうが、最初にとりあえず本稿で扱う作品を限定しておく。

当然本文を検討する必要があるので、注（3）の事典に解説のみ収められている作品は除外した。そうなると有力になってくるのは、『鎌倉時代物語集成』と『中世王朝物語全集』（ともに笠間書院）であることは言うまでもないが、後者は未完結であるので、本稿では基本的に前者に収められている作品を対象とした。しかしながらその中には、理由は定かではないが、明らかに「物語」ではないと思われる『無名草子』も収められているから、それは真っ先に除外した。悩ましいのは、主に第七巻に収められている『下燃物語』、『豊明絵草子』、『なよ竹物語』、『掃墨物語』、『葉月物語』であるが、いずれも断片であったり、抄本的であったりするので、今回は一応外すことにした。そういう意味では、『源氏物語』の補作である『山路の露』、『雲隠六帖』も同様で、もちろんカウントしなかったが、論述の都合上、言及することはある。

さらに、『下燃物語』等よりは本文がそろっていても、末尾が散逸しているという点により、『あさぢが露』、『いはでしのぶ』、『風につれなき』は除外した。悩ましいのは『在明の別』で、一応完結しているように見えるのであるが、最終五〇丁表の前に、二丁に近い空白部があるとのことであるから、ひょっとして脱落があるかもしれず、とりあえず括弧付きのものとした。同様に、『鎌倉時代物語集成』に収められている『夜の寝覚』は、中世になって改作された、いわゆる中村本であるので「閉ざされた終結」を有しているが、元は平安時代の作品であることは明らかであるし、残欠とは言えそれも現存しているから同様に括弧付きのものとした。

また『とりかへばや』は、現在も伝わっている「今とりかへ

ばや」ですら『無名草子』に見え、それ以前の成立であることは明らかである。その『無名草子』の成立は、最新の注釈書であると思われる新編日本古典文学全集本の、久保木哲夫による解説に従えば、「正治二年（一二〇〇）七、八月を上限とし、『新古今集』撰進の院宣が下った建仁元年（一二〇一）十一月を下限として、その間の約一年数か月に絞りこまれてきている」とある（二九五頁）から、それ以前の「今とりかへばや」の成立は、極めて平安に近い頃となろう。それゆえ本稿では対象から外した。

逆に『雫に濁る』、『むぐらの宿』は、冒頭は欠けているが末尾だけ残っており、判定できるので、それらはカウントした。

このようにして、『鎌倉時代物語集成』から、「物語の終結」を論じるにはあまり適当でないと思われる作品を除外していくと、残るのは、『あきぎり』、『あまのかるも』、『石清水物語』、『風に紅葉』[8]、『苔の衣』、『木幡の時雨』、『恋路ゆかしき大将』、『小夜衣』、『雫に濁る』、『しのびね』、『白露』、『住吉物語』[9]、『兵部卿物語』、『松陰中納言物語』、『松浦宮物語』、『むぐらの宿』、『八重葎』、『別本八重葎』、『夢の通ひ路』、『我身にたどる姫君』の二〇作品と括弧付き二つとなる（次節以降で括弧を付けた数字はそれを意味する）。次節以降でその分析結果を説明する。

## 三、概括と例示

対象は二〇（＋二）作品といえども、それらの「終結」をいちいち列挙していくのも煩雑であるため、最初に概括を述べ、「開けたままの終結」、「閉ざされた終結」を持つ作品の典型例を次に示し、稿者の判断の是非を判定していただく材料とする。

というわけで、まず「概括」だが、端的な数字を述べれば、二〇（＋二）作品のうち、「閉ざされた終結」を有するのは、『恋路ゆかしき大将』、『松浦宮物語』、『我身にたどる姫君』の三つを除いた一七（＋二）作品である。したがって、最初に紹介した井野の見解は正しいと言えるが、「多い」を具体的に示せば、そのようになるということである。換言すれば鎌倉時代物語のほぼ九割は、「閉ざされた終結」を持つということになる。

その典型例は『小夜衣』であろう。

年月過行て、姫君十に成給ぬれば、春宮の女御になり給ぬ。うつくしき御あはひどもめでたし。今は一の宮をぞ御位にもとおぼしめしける。御すくせどものめでたく、思ふ様なる事ども、中〳〵かきつくすべくも侍らず。たゞみ給

はん人人、おぼしやり給へ。かまへて人のためには情有べき事とみえたり。はらぐろ、わんざんもちたる人は、すゑまで此世も後の世も、いかでかよかるべき。継母のあさましき有さま思ひやるべし。めのまへにかはり行世のならひこそ哀に侍れ。人のめでたきためしには、山里の姫君にまさる人あらじとみえたり。み給はん人さも、思ひやり給ふべきなり。

（第三巻四六六頁）

引用文中に「継母」という語が見えることからも窺えるように、『小夜衣』はいわゆる「継子いじめ譚」の一種で、これも文中に見える「山里の姫君」がヒロインである。彼女は艱難辛苦の末、この少し前にヒーローである兵部卿宮と結ばれ、彼が帝になったので、この時点では中宮となっている。冒頭に見える「姫君」、「一の宮」は彼らの子供たちで、つまりはこの物語は典型的な「めでたしめでたし」で話が終わる。さらにはここに、教訓めいた、いわゆる草子地が見えることも中世の典型と思われ、他には例えば、『松陰中納言物語』の末尾などがあげられる。

よそぢの御賀もちかづかせ給へるに、おほきおとゞにさへならせたまふて、いかめしき御よそほひの世にためしなきまでにわたらせたまふ。内のおとゞにはあぜちのならせたまひて、「今はのぞみたりぬ。過つる比より世のまじはりもつゝましく、うき事のみにて過しつれども、我世に位みじかくては、後の絶なんもかなしければ、今まではしのびきつれ」とて、御ほゐとげさせたまひて、山の井殿をてらにつくりかへさせたまひて住給へり。おとゞの一とせばかりしづませ給へるえんにひかれて、あまたの人の仏の道に入たまへるは、いと頼めしきためしにあらんかし。

（第五巻一四六頁。ただし傍線は稿者）

傍線部にあるように、この物語は最後にほとんどの人が出家してしまうから、現代人の感覚から言えば、たぶん「めでたしめでたし」とは言えないと思うが、中世においてはそういうこともあるまいし、いわゆるハッピーエンドであるかバッドエンドであるかは、「閉ざされた終結」という点では何の関わりもないと判断し、もちろん両方カウントしてある。言うまでもなく傍線部は教訓的でもあるわけで、先の引用文と二つ読み合わせてみれば、こうした文言があると、強い終結感があるというのは首肯されるであろう。

話を戻して恐縮だが、『小夜衣』と同じ「継子いじめ譚」でも、『落窪物語』の末尾にはこのような文言は一切見られず、『住吉物語』は類似した末尾を持つ[10]ことは、たぶん現在残っている『住吉物語』は中世に作られた改作本だからであろうという推定は、注（2）の拙稿でも述べておいたが、ここで蛇足を一つ加えておけば、つまり稿者は、元の『住吉物語』の結末は、今のような形ではなかっただろうと思っているということである。その根拠については追々説明していくが、教訓という形でなくとも、鎌倉時代物語はこうした、明らかに「終結」と感じられる文言を持つものが他にもある。

それは例えば、『あきぎり』の「（まことや、かの中宮の）かゝるありがたきすくせのめでたさを、のちのよの人に見せたてまつらんためにかきとゞめぬ」（第一巻九〇頁）、『あまのかるも』の「御いのちさへ、御こゝろのまゝなりけると、世人も申つたへけるとぞ」（第一巻三〇一～二頁）、『石清水物語』の「おなじはちすの望も、むなしからざるべけんとぞ、ほんには侍るめるとかや」（第二巻一五三頁）などであるが、平安朝の物語と同じ「とぞ」で終わるものもちらほらとある。とにかく鎌倉時代物語は、こうした文言を律儀に書き付けたものが多いので、この節最初に示した、「閉ざされた終結」が圧倒的に多いという結果になるのである。

ではその反対の「開けたままの終結」の例はとなると、最も典型的なのは『恋路ゆかしき大将』であろう。話自体も落ち着かないし、何よりその終わりは『堤中納言物語』中の「虫めづる姫君」のように、「いかなるべき人のはてにかとあやしく、つぎ〳〵のまきになんと本に」（第三巻三四六頁）と終わるのだ。こうなってくると、長編物語と短編物語の間にどれほどの差異が存在するのかという問題ともつながってくるが、残念ながら現存する短編物語（集）が『堤中納言物語』一つしかない現時点では、その問題を追及することは不可能なので、これ以上掘り下げない。同様の結末（話にオチがない）としては『我身にたどる姫君』もあげられ、それでこれらを「開けたままの終結」としてカウントしている次第である。

残った『松浦宮物語』は、周知のようにやや複雑な様相を呈しているので、かなり長くなるがそのまま引用しよう。

身をかへてしらぬうき世にさすらへてなみこす袖のぬるゝをやみむ

思ひよらぬこゝろとさは、これもくもりなきにやと、そらはづかしきものから、

「しらぬ世も君にまどひし道なればいづれのうらのな
　みかこゆべき
あやしう、ゆめのやうなるひがみゝのきこゆるかな。などかう心えぬことは」と、せめてかきよすれど、なをうちこぼれつゝ、とけぬ御気色、わりなき心のうちには、「我も、人にことなるゆへをきゝしかど、世のつねならずありがたきみるめに、契をむすびながら、なを心にしみてものおもふべくも、むまれきにけるかな」とおもふにも、又、くみてやしられむと、なべてならぬ御さまどもは、はづかしうぞおもひみだれたまふ。

このおくも、本くちうせて、はなれおちにけりと、本に。

この物語、たかき代の事にて、歌もこと葉もさまことに、ふるめかしうみえしを、蜀山の道のほとりより、さかしきいまの世の人のつくりかへたるとて、むげにみぐるしきことどもみゆめり。いづれか、まことならむ。もろこしの人の、「うちぬるなか」といひけむ、そらごとのなかのそらごと、をかしう。

貞観三年四月十八日
　そめ殿の院のにしのたいにて、かきおはりぬ
花非花霧非霧、夜半来天明去、来如春夢幾時、去似朝雲
　無覓処（白　紙）

これも、まことの事也。さばかり傾城のいろにあはじとて、あだなる心なき人は、なに事に、かゝることはいひをきたまひけるぞと、心えがたく、唐には、さる霧のさぶらふか。

（第五巻二二五～六頁。傍線稿者）

傍線部以降は、作者・定家によるいわゆる「偽跋」で、本物の跋文ではない。しかし、物語の写本にはしばしばこういうものが見られることは、今さら贅言するには及ばないであろう。そして傍線部にあるとおり、その前でも物語は決着していない。それどころか、そこに「このおくも」という文言があることからも窺えるように、『鎌倉時代物語集成』で言うと四頁ほど前に当たる二二二頁にも、「本のさうし、くちうせてみえずと、本に」とあり、無論この前後もつながっていない。この作品は

定家自身が作ったものであり、その前にあったものを書写したわけではないことはほぼ定説化しているから、注（3）の書が説くようにこれは、定家が力業で物語を終わらせてしまったとしか考えようがないであろう。すなわちこれらの文言は、ここで物語が終わっているのだと強弁する、いわば「偽終結」にしか過ぎないであろうから、この作品を「開けたままの終結」を有するものとしてカウントした次第である。しかし、それでも何かしら終わりらしき文言を書き付けずにはいられなかったという事実を、ここでは重視したい。何故ならそれが平安朝の物語と、それ以降の物語を分ける特徴であると思うからである。次節で詳しく述べよう。

## 四、平安と中世、物語の結末の比較

注（2）の拙稿の繰り返しになるので今まで極力避けてきたが、本節の前提ともなるので簡潔に振り返っておけば、鎌倉時代物語とは逆に、平安朝の物語（特に作り物語）は、ほとんどが「開けたままの終結」であると思う。そもそもこの論考の発端である『源氏物語』はおくとしても、一番顕著なものは肝腎の唐后の転生が描かれないままに終わる『浜松中納言物語』であるが、『落窪物語』も、ヒロイン落窪姫が幸せになった「めでたしめでたし」で終わらず、いきなり「「典侍は二百まで生ける」とかや」（三四三頁）[11]と、はじけて終わる（もっとも、後代の書き加え説はあるが）し、同じく「めでたしめでたし」で終わる『うつほ物語』も、注（2）の拙稿でも書いたように、少なくとも現存のテキストには楼の上・下巻の最後に、「次の巻に、女大饗の有様、大法会のことはあめりき。季英の弁の、娘に琴教へたまふことなどの、これ一つにては多かめれば、中より分けたるなめり、と本にこそ侍るめれ」（③六二一頁）とある。[12]また、帝に即位して、同様に「めでたしめでたし」であるはずの『狭衣物語』も、

たちかへり折らで過ぎ憂き女郎花なほやすらはん霧の籬に

と眺め入らせたまへる御かたちの夕映、なほ、いとかかる例はあらじと見えさせたまへるに、世とともに物をのみ思して過ぎぬるこそ、いかなりける前の世の契りにかと見えたまへれ。（②四一〇頁）

と、なお愁いに沈む狭衣邸の姿が描かれて終わる。これと同時

期の『夜の寝覚』は、もちろん末尾が散逸しているのであるが、その昔、院生時代に神田龍身から、「物語が散逸するのは、散逸した部分が面白くなかったからだ」という説を聞いて、「一理ある」と思ったこともあり、寝覚の上の寝覚が続いている今の終わり方が、平安時代の人には最も受け入れやすかったからではないかという夢想もついしてしまう。そういう点では、もし『とりかへばや』も中古に入れて良いとすれば、注（2）の拙稿でも指摘したように、「めでたしめでたし」の、新編日本古典文学全集で言うところの第五七節「大団円。東宮即位。二宮立坊。姫君入内」で終わっているわけではなく、次の第五八節「内大臣、宇治の女大将を思い、嘆き絶えず」が付いているということが挙げられる。そして、ヒロインが月に帰り、話が「閉じ」そうな『竹取物語』でさえ、逆の捉え方もあるかもしれないが、今も立ち上る富士の煙で終わるわけである。こう数え上げていけば、最初にも述べたように、平安朝の物語の終結は「開けたままの終結」がスタンダードであると言っても良いと思われるのである。

ところがこれが、たった一時代しか違わない鎌倉時代、あるいはそれ以降になると、正反対の結果となることは、本稿がこれまで示してきたとおりである。もちろん、中古・中世ともに、現存する物語数より、散逸した物語数の方がまさると推定されているから、これがそのままの数字で言えるとは稿者も思っていないが、かと言ってこれだけの差がある数字だと、逆転したものになるとも考えがたい。となればこれは、中古から中世へと時代が移る時、物語の終結は閉ざされるようになったと考えるしかないのではなかろうか。そして仮にそうした仮説を立ててしまうと、腑に落ちる現象は多いのである。

まずは前節でも述べた、中世に改作されたことが明らかな『住吉物語』は、同じ「継子いじめ譚」である『落窪物語』とは異なり、「閉ざされた終結」を有するということであるが、無論これは、原『住吉物語』が現存していないので、確かな証拠にはならない。しかしこれを思わせるような現象が、室町物語である『しぐれ』に見られるのである。『しぐれ』の物語は次のように終わる。

かくて都には目出度ざゞめき合ひける事、横川に伝へ聞き給ひて、中将入道殿よりおとひが許へかくぞ書きて送られける。

花めける花の袂も羨まず苔の衣ぞ我身にはつく

かしこくぞ花の袂をかはしける君が栄へをきくにつけ

ても

三瀬川逢瀬ときくを頼みにて死出の山路のいそぎをぞ

する

と書きて送られけるを、姫君御覧じて猶も恋しくおぼしめして、后の位にならせ給へども露も嬉しともおぼされず。御心の内には、あわれたゞ契りしまゝに中将殿と一庵に住みて憂き世を過ごさばいかに嬉しかりなむとおぼしける。されども力及ばせ給はず、いよ〳〵目出度栄へ給ひけり。

姫君の果報も、中将殿の真の道に入給ふも、皆これ観音の御利生なり。[13]

傍線部に見られるように、あたかも平安朝の物語を思わせる「開けたままの終結」をするかと思いきや、次には「されども力及ばせ給はず、いよ〳〵目出度栄へ給ひけり」という、強引にオチを付けるかのような文を続け、最後に「観音の御利生」という文言で終わるというのは、述べてきたように、いかにも中世的と言えようが、ここで注目したいのは、先にも述べたように、このオチの付け方がいささか強引に見えるということなのである。と言うのはこの「しぐれ」は、散逸物語の『恋に身かふる』の改作ではないかという説があるからである。[14]

『恋に身かふる』は散逸している以上、細かいことは分からないが、少なくとも文永八年（一二七一）成立の『風葉和歌集』には取られているから、それ以前の成立であることは間違いない。するとその成立は鎌倉のごく初期、場合によっては平安もあり得るということになり、そこまで考えると、『恋に身かふる』の終結はひょっとしたら傍線部までだったのであり、それ以下を付け加えたのが、『しぐれ』なのではないかという想像が生まれてくる。無論これも何の証拠もないものであり、単なる「想像」でしかないが、一つの可能性として指摘しておく。

本稿も終わりに近づいてきたので、話を元々の課題に近づけていけば、注（2）の拙稿冒頭でも述べたように、未完が疑われる『源氏物語』夢浮橋巻で、唯一完結を示しているのは末尾の「とぞ本にはべめる」という文言なのだが、それすら「本を書写した人が、「底本にこうあります」と写本の末尾に加えたもので、鎌倉期以後のものといわれる[15]」という疑いがあって、結局決め手になり得ない。だがここでは別の角度から注目しておけば、やはりここにも「鎌倉期以後のもの」とあることだ。

もちろん稿者はこれを「鎌倉期以後」に書き加えられたと思っているわけではなく、もう一つの説である「元からのもの」という立場に立つ者だが、しかし、いずれにしても鎌倉期以後は

こういう「終わり」を示す文言を書き加える傾向があるということだけは、今までも言われてきたことなのである。そう考えると、結局「終結」をもたらすことはできなかったが、夢浮橋巻の後日談を書く『山路の露』も、やはり中世の産物であったことに気づく。つまり、中世は物語を閉じようとする傾向があることは、実はこれまでにも無意識に言われていたのであり、それゆえ本稿のメインタイトル「物語はいつ「閉じられる」のか」という問に対する答えは、ひとまず「中世」としておきたい。

## 五、まとめ

以上、平安朝の物語の主流は「開けたままの終結」であり、それが「閉じられる」ようになるのは中世からで、したがって『源氏物語』夢浮橋巻は、あれで完結していると見て良いのだということを、いわば間接的に述べてきたのだが、最後にまた悪い癖で大風呂敷を広げてしまえば、サブタイトルとした「「現代常識」が誕生する時」も、第二節最初に述べたように、現代もまた物語（小説）は閉じられるべきというのが「常識」となっているとすれば、同様に「中世」として良いのではないかということなのである。

日本語学でも同じ結果が出ると聞いているが、中古から中世に移り変わる時に文化的画期があるのは常識である。障子も、現在のものが誕生するのは書院造りができてからだし、座るところだけでなく部屋全体に畳を敷き詰める慣習も、同じく書院造りの産物である。あるいは僧侶の妻帯等もこれに入れて良いかもしれない。同様の例は数え上げていけばかなりの数に上るはずであり、その中の一つに、「物語の終結の仕方」もあるのではないかということなのである。

これは別に中世が文化を曲げたと言っているわけではない。文化とは常に移り変わるものであり、それには是も非もないからである。言わんとしているのは、平安時代の常識というのは明らかに今の常識と異なっているから、今の常識でもって平安朝の文学を判断してはならないという、これまでも普通に言われてきたことの、改めての確認をもって、本稿の結びとするということなのである。

**注**

（1）上田真・山中光一編『終わりの美学——日本文学における終結——』

（明治書院　一九九〇年）中のターム。西洋の文学分析概念である「オープン・エンディング」の和訳らしく、「オープン・エンディング」もしばしば用いられている。また、このようなタームがあることからも察せられるように、西洋の小説は基本的に「閉ざされた終結」だそうである（同書による）。

（2）拙稿「『源氏物語』夢浮橋巻の構造――錯綜する時間を手がかりに」（『国文学研究』第百八十集　二〇一六年一〇月）。

（3）神田龍身・西沢正史編（勉誠出版　二〇〇二年）。

（4）注（3）と同書。八二頁。

（5）注（1）と同書。一五八頁。なお、かっこ内の数字は『川端康成全集』（新潮社、昭和五五―五九年）の巻数とページ数だそうである。

（6）注（3）と同書。六四一～二頁。ただしこれは、藤井隆による最新の説で、今後はこれを「更に発展させ」なければならないと書かれている（六四三頁）から、この事典がこの説を「決定」としているわけではないことは、念のため申し添えておく。あくまでも参考までに掲げたまでである。なお、そこには「類」の下位概念として、「種」というものも挙げられているが、煩雑になるのでここでは省いた。

（7）「同質」というのは、詰まるところ「恋物語」とほとんど同義である。平安時代の物語がおおむねそれであることは、異論のないところであろう。『鎌倉時代物語集成』に収められている作品もほぼ例外ではない。そういう意味では、作品冒頭の「解説」に「怪異談」とまとめられている（第五巻四〇八頁）『別本八重葎』は、明らかに「閉ざされた終結」を有してはいるが、読んでいても違和感を感じた。しかし『源氏物語』蓬生巻を下敷きにしているのも明らかであるので、今回は数に入れた。

（8）『風に紅葉』は、かつては未完とも言われたそうであるが、今は完結説が強いので、それに従った。

（9）『鎌倉時代物語集成』に収められている『住吉物語』は、藤井本・晶州本・大東急文庫本と三つあるが、別の物語というわけではないし、終結もすべて閉ざされている（割れていない）ので一作品とカウントした。

（10）参考までに『住吉物語』のそれぞれの写本の末尾を示しておけば、次の如くである。

（藤井本）

年月ゆくほどに、大将殿には、ち、関白ゆづり給ひぬ。いよ〳〵すゑの世たのもしくぞ侍ける。わか君は元服せさせ給て、三位中将とぞ申ける。ひめ宮（ママ）は十八にて女御にまいり給ける。侍従はおとな女にて、よろづに大事の人にぞおもはれて、内侍に成ぬ。見聞人、うらやみあへり。大将、姫君、末まで繁昌して、目出度ぞおはしける。

さてま、母、見と聞く人〻にうとまれ、朝夕はねのみなき給て、世中おとろへて、つゐにはかなく成給ふ。むくつけ女は、あさましきありさまにて、まどひありきけるとかや。

むかしもいまも、人にはらぐろなる人は、か、る事なり。これを見きかむ人〳〵は、かまひて人よかりぬべきなりとぞ。

（第四巻一九四頁）

（晶州本）

さても月日をふる程に、姿おとろへて、つゐにはかなく成にけり。むくつけ女ひとりしてかきあつかひけるほどに、我身も同じたぐひに成にけり。さてのち、かたの事どもする人もなかりけるこそ、哀に心うかりけれ。是を侍従き、て、あはれなるよし申されければ、北の政所、のち〳〵の御事ども、中の君のいとなむよしにて、さま〴〵にいみじくさせ給けり。世の人うけ給て、「か、る御心なれば、御果報めでたくありがたくおはします」とぞ申ける。

いまも昔も長谷の観音は、しるしあらたにおはしましけり。なさけある人は行末もさかへ候也。むくつけ人は、まのあたりにかれうする物也。ありがたくあはれなる事を、末の世の人ぎゝも、しのばれ候へかしとて、書をきしなり。

（晶州による奥書は略。第四巻二四三～四頁）

（大東急文庫本）

かくて過行ほどに、大しやう殿は天下ゆづられ給ひて、そのいきをひならびなし。わかぎみもげんぶくし給ひて、三みの中将とぞ申ける。ひめぎみ十七にならせ給ふとし、女ごにまいりたまひけり。じゞうはないしになり、世に人にきゝしのばれてぞありける。すみよしのひめぎみをば、きたのまん所とぞ申しける。

まゝはゝ、をのがむすめよりはじめ、きく人にいたるまでうとみはてにければ、そのすみかもすみあれて、よもぎがそまと成はてて、むくつけをんなとたゞふたり、あかしくらしけるほどに、心のうちには、ちからをよばぬ我たくみふるまひしことの、神仏の御心にたがいたてまつることも、我身ながら心うくて、おもひしづみけり。そのつもりにや、ほどもなくはかなくなりにけり。むくつけをんなも、ともにたえにけり。さてものち〳〵のわざ、とぶらふ人もなかりけり。このよし、きたのまん所きゝ給ひて、あわれ成とて、中のきみ、三のきみのするやうにて、いとなみ侍れば、世の中の人、ありがたくぞおもひあわれけり。

むかしもいまも、はせたにのくわんをんの御しるし、いとあらたにぞおはしける。なさけある人は、行すへはる〴〵とさかへ、心あしき物は、めのまへにをとろへうするなり。あわれなる事、さてしもむなしくならんことのいたはしさに、すへの世まで、心あらん人はおもひしるべしとて、かたのごとくしるし侍り。これをみん人〳〵、ゆめ〳〵人のためうしろぐらき事を、ふるまひおもふべからず、〳〵。

何とたゞとし月物をおもひけんかゝるめでたき世にもあひつゝ

（第四巻三〇五～六頁）

桑原博史の分類によれば、藤井本は流布本、晶州本は中間本、大東急文庫本は広本になるのだそうで（新編日本古典文学全集『住吉物語』解説一四五～六頁）、その名の通り、だんだんと文言が加わっているのが分かると思うが、中間本は流布本と広本との接触によってできあがったものと推定されているので、しばらく置くとしても、広本が流布本を大幅に増補したものであるのは間違いないらしく、それはつまり、物語の終結をより終結らしくしたいという意識の表れと見ることができよう。

(11) 平安朝の物語の本文は、原則、小学館の新編日本古典文学全集本により、巻数、頁数等を付した。

(12) 本稿と同じく、物語の結末について考察する、今西祐一郎による岩波新日本古典文学大系『源氏物語　五』解説「『源氏物語』の行方」でも、原田芳起による角川文庫本の脚注を援用して同じことを指摘している。

(13) 岩波新日本古典文学大系『室町物語集　下』五三頁。傍線稿者。

(14) 岩波新日本古典文学大系『室町物語集　下』の『しぐれ』の解説ではそう断言している（二頁）し、注（3）の書でも、「～という指摘もある」（八〇五頁）と、いささかトーンダウンしているが、そのことは書かれている。

(15) 新編日本古典文学全集『源氏物語⑥』三五九頁頭注一九。